

児童福祉施設等における事例に関する検討

日本総合愛育研究所

須永進

■ 研究目的

昨年の本研究では中学生や高校生を対象とする「思春期体験学習」（以下、体験学習）に関して、研究班全体としてアンケート調査を実施し、その長期的および短期的効果を中心に結果をまとめる一方、個別的には調査地域を関東に絞り、宇都宮市など2市2町1村で行われている体験学習の実施状況を明らかにした。1)

また先の調査研究においても明らかになっているように実施機関では保健所が数の上で多くなっている2)が、近年では児童福祉施設等を利用した体験学習も次第に増加している。本年度はこうした保育所における体験学習について神奈川県3市（平塚市、大和市、秦野市）の実施状況を事例に取り上げるとともに、保育所と同様に児童福祉施設のひとつである乳児院での体験学習を1例調査し、それらの現況と学習内容および今後の課題などを明らかにすることを目的としている。

■ 研究方法

現在、保育所において体験学習を実施している市町村のうち、本年度は神奈川県、平塚市、大和市および秦野市における実施状況を主に聞き取り調査を中心に進め、学習内容や方法さらには保健所での体験学習との違いなど、比較分析・検討を行った。また、東京にある乳児院の状況についても同様の方法により状況把握を行い、その実施経過を明らかにした。

■ 研究結果

1. 保育所を基盤とした体験学習

1) 平塚市の事例

神奈川県平塚市では、開設当初「次代を担う高校生に保育園事業の実践活動を通じて、乳幼児の生活の実態を知るとともに、児童福祉への理解を深

め保育ボランティアとして社会活動に参加するといった意識を培う」目的をもって、市内の保育所において体験学習が実施されてきたが、近年ではさらに「正しい性知識により生命の尊さ、親となる自覚や責任について考えさせ生涯にわたる健康な生活習慣形成の醸成を図る」目的が加えられている。

この体験学習への参加にあたっては、市の広報と高校あての案内により、高校生自身が申し込むかたちをとっている。したがって教科学習の一環としてではなく、あくまで自己の意志（ボランティア）による参加形式になっている。

開設からの応募状況と参加者数の年次推移は次の通りである。

(年度)	(応募者数)	(参加者数・カッコは男子)
昭和63年	83	77 (2)
平成1年	150	115
2年	161	99 (1)
3年	177	123
4年	178	133 (4)
5年	172	133 (1)
6年	124	114 (2)
7年	190	122 (6)

募集人数は各年80人以内となっているが、毎年それを越える応募があり、現状では3・2年生を優先させているが、その背景として高校生の保育ないしはボランティア活動への意識の高さがうかがえる。また、数の上で少数ではあるが男子の参加も増える傾向が見られる。

次に、同市における体験学習の内容の基本を見ると、(1) 保育園児とのふれあいの中で「保育とは何か」を考え、学ぶ (2) 保育園におけるカリキュラムを消化 (3) 思春期における健康管理・性に関する知識についての講演会の開催、となっている。具体的には、保育所での一日（午前8時30分～午後5時まで）を子どもと一緒に生活することになっている。期間は毎年夏休みの決められた日時に行われ、各生徒はその間の5日間参加する。

平成7年度のスケジュールでは、

(1) はじめに、「保育実習説明会」が行われ、オリエンテーションでは、服装や持ち物、実習期間中の心得等の話が行われている。

(2) 次いで「高校生の性を考える」をテーマとした講話がされる。

(3) 講話後、実習先の保育所の所長との懇談となっている。その後、各自決められた保育所での活動が5日間行われ、終了となる。

このように、平塚市の保育所における体験学習では、子どもの保育やそれに関連した内容や方法への学習は特にカリキュラムの中には取り入れられてはおらず、むしろ子どもたちとの直接的なふれあいやかかわりを中心に、まさに体験を重視したかたちで行われている。たとえば、保育の方法では、「あかるく元気な」あいさつに始まり、「保育(先生)達の姿勢を学びましょう」と、体験の中で学ぶ姿勢を求めている。また、保育の内容においても、「子ども達の援助とあそび相手」や「優しいことばづかい」が「心得」として位置付けられており、実際の保育を通じて学ぶ視点が明確になっている。

平成7年にこの体験学習に参加した生徒の感想(アンケート)では、次のような結果が出ている。(回答者79名) 3)

まず、参加の動機については

- 1) 自分で決めた 70 (88.6%)
- 2) 友人に誘われた 8 (10.1%)
- 3) 学校の勧めで 0 (0.0%)
- 4) 家族の勧めで 1 (1.3%)

参加した約9割の生徒が自分の意志によると回答している。これはボランティアへの関心だけでなく、保育(=子どもとのかかわり)に対する高校生の意識を表している結果ともとれる。

それに関連して、「将来、保育になりたいと考えているか」では、

- 1) いる 59 (74.7%)
- 2) いない 4 (5.1%)
- 3) まだわからない 16 (20.3%)

と、8割近い生徒が保育者への職を希望するという結果がでている。この体験学習の本来的な目的ではないにせよ、子どもを保育することへの関心が、高まった結果と見られる。

次に、保育所と幼稚園との違いを生徒が正確に認識しているかどうかでは、参加した結果「知った」者の割合が4割(39.2%)にあたる31名おり、保育所への認識がさらに明確になった生徒を合わせると、ほぼ全員となっている。これは、体験学習の大きな目的のひとつである「児童福祉制度に対

する理解を深め」(市町村母子保健事業実施要綱)に該当し、同市での体験学習が学習効果の点において十分な役割を果たしているといえそうである。最後に、今後もこうした保育への参加(ボランティア)の意志については、75名(94.9%)がその意志がある、と回答している。福祉教育という視点でとらえ直した場合、この体験学習の評価は高いと考えてよいであろう。なおアンケートの終わりに記されている参加後の感想では、ほとんどすべての生徒が、体験学習を肯定的にとらえている。そのうちのひとりには次のように述べている。「普段あまり幼児に接することがなかったので、最初は少しとまどったけれど、保母さんを手本に、子ども達と一緒に生活する事ができた。この体験はとても貴重な体験になった。機会があればもっとやりたいと思う。」

また、ある生徒は「小さい子について何も知らないまま、実習を受けましたが、本などを読んで勉強するのは違って、自分の体、目で体験して、とても勉強になりました」と、体験後の学習効果を挙げ、評価している。

なお、今後の課題について担当者は次の点に言及している。

- 1) 実施期間をもっと長くし、学習内容の充実を図る。
- 2) 高校、とりわけ進学校の生徒の参加が少ない。
- 3) 男子生徒の参加を進める。
などである。

2) 大和市の事例

神奈川県の大和市社会福祉協議会では昭和62年度より「中学生や高校生に福祉について学び、考え、実際にお年寄りや障害をかかえる方々とふれあってもらうために」「福祉体験サマー・スクール」がはじめられ、保育園実習も平成4年にその中に加えられ、6年には保育園実習コースとして独立し、「中高生保育入門講座」を開催している。実施にあたって、主催者側では「現代の若者たちは、福祉について関心はもっていても福祉問題を考えたり障害を抱える方や乳幼児などさまざまな人たちと接する機会が不足している」。そこでこの「講座」を通して「保育園での実習や保育に携わる人たちの話を聞くなど実際に見たり聞いたり体験」し、その体験によって「児童福祉問題にふれ、ともに考え学びあうこと」が必要である、と保育所での体験学習の目的について述べている。

また、同市の体験学習では対象を中学生と高校生とし、中学生には「福祉問題の学習と乳幼児とのふれあい」、高校生は「ボランティア活動参加の

きっかけづくり」として、この体験学習を位置付けている。日程は、夏休み期間を利用し、中学生は2日間、高校生が3日間保育所での活動を行うことになっている。

平成5年度から7年度の3カ年における参加者数の推移は次の通りである。

	参加者数	(男子)
平成5年度	46	(4)
6年度	57	(2)
7年度	68	(0)

年々、この講座への参加人数は増加傾向にあるが、他方男子生徒の参加が減少していることがわかる。

平成7年度の体験学習のプログラムは次の通りである。

第1日目・開校式オリエンテーション

- ・事前学習会「保育園ってどんなところ」
「どんな遊びが好きかな」
- ・ビデオ学習
- ・実習オリエンテーション

第2日目以降、2～3日間の保育所での活動

(時間は、8:30～16:00)

終了・学習のまとめ・開校式

事前学習では、特に保育所の役割や乳幼児の発達等の学習が行われ、児童福祉施設や子どもへの理解を図るような内容が準備されている。

また、子どもの好むような簡単な遊びも配布されるパンフレットに紹介されており、参加生徒の参考になっている。

この他、体験学習に参加するにあたって、注意事項が示されている。

たとえば、園児に対しては「子どもの名前をできるだけ覚えて、名前を声かけましょう」の他、分からないことが起きたときは「すぐに保育士に聞き」「保育士の指示に従いましょう」と、記されている。また、服装では、「時計やアクセサリ」はつけず、髪は束ね、爪も切ってくることに、事故やケガへの配慮を促す内容も示されている。

この講座に参加した生徒の感想では、子どもへの関心だけでなく、保育士の仕事内容や職業観について新たな認識を持つようになっている者が多く見られる。

たとえば、子どもに関しては「同じ3才の子でも言うことをよく聞く子や自分のことをしっかりできる子と、言うことを聞かなくて、人に甘える子といろいろいたのに驚きました」。また保育士の仕事は「子ども一人ひとりにきちんと気配りしていて」「子どもが好きだけではできない」が、その分「やりがいのある仕事」と述べ、「私も保育士になれる

ように頑張りたい」と記されている。

この体験学習の講座を担当している方との聞き取りで今後の課題について、大きく次の3点が指摘している。

1つは現在の実施期間が夏休みに限定されているため、参加者が限られている。今後は参加者のために他の期間の実施も必要ではないか。

次に、日程を見ると中学生が2日間、高校生が3日間となっているがもう少し長い日程が欲しい。

最後にプログラムの内容に関して、理解度や関心度が違うので中学生と高校生に分けて学習できるようにする必要がある。などである。

以上のように、大和市における体験学習は、平塚市の場合と同様に生徒が自主的に参加できるボランティアのかたちを基本としているが、対象年齢が、大和市では中学生から始められている点異なっている。また、日数も、平塚市が5日間であるのに対し大和市は2～3日間となっている。

3) 秦野市の事例

先の平塚市および大和市と同じ神奈川県にある秦野市では、市の社会福祉協議会が地元の高校と協力して体験学習を実施している。

その目的としては、「社会福祉施設(保育所)におけるボランティア活動を通して、福祉に対する理解を深め、又、将来の保育者として体験をする機会とする」と、なっている。

対象は市内4校に在学する生徒及び在住の高校生で、場所は市内にある公立・私立保育所15カ所である。

過去3カ年における参加者数の年次推移は次の通りとなっている。

平成5年度 97人

6年度 113人

7年度 113人

なお男子生徒の参加は平均で約2名程度とのことである。

期間は夏休み中で、4～7日間となっている。保育所での活動の前に、社会福祉協議会の方から実施にあたっての趣旨説明があり、その後各自保育所の園長先生から具体的な保育所での活動内容を聞き、後日から決められた保育ボランティアの活動となっている。参加した生徒の感想をまとめると、次のようになっている。はじめの時点では、「不安なことがたくさんあり」「緊張の日々」の連続であったが、次第に「慣れていき、子ども達と仲良く遊ぶことができるようになりました」。実際のボランティアの活動では「園児達とは、お山を作ったり、ボール投げやおにごっこをしたり、高校生って

事を忘れて遊ん」だり、「おむつを取り替えたり、ごはんを食べさせたり」して過ごしている。なかにはこのかわりを通して「(小さい子どもは) 毎日が少しずつ違います。つかり立ちができたり、ハイハイができそうになったり。他の子どもも、みんな一日一日が違うように見えました」と子どもの成長を観察できる者も一部見られた。また、保育者に対する感想も少なくなく、仕事の大変さや尊敬の気持ちを表現している者が一部に見られ、同時に自分の将来の職業にしたいとの希望を書き表している。

活動の最後には、どの生徒もこの体験学習に対して「貴重な経験になった」「勉強になった」など、前向きに評価している割合が多くなっている。

今後の課題としては、参加希望者が増えているが、受け入れる保育所がいっぱいで、受け入れ期間の見直し(たとえば、現在の夏休みだけでなく、他の休みも考慮)が必要となっている。また、学校と保育所との連絡が十分でないことがある、などである。

2. 乳児院を基盤とした体験学習

東京の杉並区にある社会福祉法人「カリタスの園」では、併設されている乳児院「つぼみの寮」において、「親の育児体験学習」の他に中学生を対象とする体験学習が実施されている。

ここでは、10年ほど前から主に私立女子中学校(キリスト教系)の生徒によるボランティア活動のひとつとして行われて、乳児院の子どもの保育にかかわってきている。

近年特に一人っ子が多くなり、この中学校でもそうした生徒が少なくなく、そのため、小さい子どもの世話をしたり、一緒に遊ぶ経験の少ない生徒が見られるようになって来ていることから、こうした体験学習が続けられている、という。(担当者)

この乳児院における体験学習では、生徒の希望する日と乳児院との都合により、1日を単位に行われ、保育内容も通常の乳児院での生活がベースになっている。

たとえば、生徒のボランティア日誌によると、

- 1) 小さい子をお風呂に入れる。
- 2) おやつを食べさせる。
- 3) 散歩に連れていく。
- 4) 着替えさせる。
- 5) 一緒に遊ぶ。

などである。

乳児院という施設の性格上、年齢の小さい子どもが多いため、多くの生徒ははじめは戸惑ったり、

かわり方がわからないことがあるが、すぐに慣れてくるようで、これまで事故やケガはほとんどなかったとのことである。

生徒の感想を見ると、子どもへの関心やかわり方が次第に自然になり、観察力が育ってきているケースが見られる。Aさんは中学1年生から2年生にかけて、9回参加している。その主な変化を見ると次の通りである。

初参加・・・はじめに(物を子どもから渡されて)あせってしまった。

2回目・・・子どもの面倒を見て、かわいいと思っただけでなく、考えさせられることが多かった。2度目で前よりよく接することができた。

5回目・・・今度の子達は、言葉が話せるので、少しやりやすかった。でも、その分影響されやすいので、変なことを教えてしまうといけないというこわさもありました。もっと素直に接するべきだと思った。

7回目・・・すぐなついてくれてうれしかったです。弟や妹のいない私には、とても貴重な体験になったと思います。来年はもっと始めから入り込めるようにがんばりたい。

9回目・・・(子どもとのかかわりでは)体と心であたるのが1番かと思います。それと向こうの言葉が通じなくても、こちらの言葉は通じているのにも注意すべきだと思います。

また、1年生から3年生まで計7回参加しているBさんも、はじめ子どもに慣れなかったり、「疲れてしまった」が、参加回数を経るうちに楽しくなり、「来るたびにいろんな子どもたちと知りあえて、うれしく」なったと日誌に記すようになっている。

さらに、中学2年生から3年生までの間に5回参加しているCさんは子どもへの世話や一緒に遊んでいるなかで、子どもへの観察力が育つことが日誌から理解できる。たとえば、「人見知りする子もいたけれどこちらから積極的に接すれば笑顔がもっどてきます。その子が何を言おうとしているのか何をしてほしいのかきちんと感じとるべきだ」「みんなで遊べるよう配慮することが大切だと思う」など、実際にふれあいかかわるなかで生徒の意識が高まっている状況がここからわかる。

このように、この乳児院では体験学習としての特別なカリキュラムは設定せず、普段の保育を通して進められている点が特徴になっている。

また、ここでは、この中学校以外にも地域の公立中学生を受け入れており、地域における体験学習にも場の提供を積極的に行っている。

3. 保健所における体験学習との比較

保育所や乳児院等の児童福祉施設における体験学習に比べ、保健所による体験学習は、これまで調査できた地域に限って見ると、内容が総花的で、どちらかと言えば性教育を含めて保健関連の事項が用意されており、ふれあい対象の子ども年齢も乳児健診時を利用して行われるため、低くなっている。3) また、子どもとの直接ふれあう時間も保育所に比べ全般に少ない傾向にある。さらに、中学生が家庭科教育の一環として体験学習をする場合、原則として全員参加となるため、参加する生徒に見合おう乳幼児が少子化傾向の影響で健診時に集まらないなど、保健所での体験学習に問題が出ている実施体も一部見られるが、これまで調査した保育所ではそうした事例は聞かれなかった。さらに、保健所では事前学習を設けているケースが多くなっているが、保育所は、実際に子どもにふれあう体験学習に重きを置いているところが多く、極めて実践的な内容になっているケースが見られている。この傾向は乳児院でも同様であり、実際の子どもとのかかわりのなかで、さまざまな学習を行っている感がする。

■ まとめ

本年度の調査結果をまとめると、次の通りである。

まず今回調査した神奈川県3市に限って見ると、その体験学習の中心は保育所であって、授業の

一部というよりボランティア活動のひとつとして進められている。そのため、生徒全員が参加するケースは少なく、ボランティア活動や子どもの保育に興味や関心のある者が自主的にかかわるといふかたちになっている。また、保健所による体験学習と違って、じかに子どもにふれあう学習が中心になっており、年齢も0歳から就学前にわたっている。日数では、夏休み期間の2~3日から7日前後で、時間はほぼ保育所の保育時間にそっている場合が多い。さらに今回調査した範囲では参加生徒のうち、圧倒的に女子が多く男子生徒が少なくなっている。また、こうした体験学習が東京では、すでに一部の乳児院で行われており、示唆に富む実践が展開されていた。今後の課題としては体験学習における内容の充実や行政機関(市町村)、学校など関連機関との連携のあり方などが多く指摘されている。

■ 参考文献

- 1) 須永 進『思春期体験学習の評価に関する研究』p 283~285 厚生省心身障害研究「望まない妊娠等の防止に関する研究」平成6年度研究報告書
- 2) 山本、宮城『思春期体験学習の実施形態による実施主体側からみた評価』p 304~305 厚生省心身障害研究「望まない妊娠等の防止に関する研究」平成6年度研究報告書
- 3) 1) 参照



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



まとめ

本年度の調査結果をまとめると、次の通りである。

まず今回調査した神奈川県の3市に限って見ると、その体験学習の中心は保育所であって、授業の一部というよりボランティア活動のひとつとして進められている。そのため、生徒全員が参加するケースは少なく、ボランティア活動や子どもの保育に興味や関心のある者が自主的にかかわるといふかたちになっている。また、保健所による体験学習と違って、じかに子どもにふれあう学習が中心になっており、年齢も0歳から就学前にわたっている。日数では、夏休み期間の2~3日から7日前後で、時間はほぼ保育所の保育時間にそっている場合が多い。さらに今回調査した範囲では参加生徒のうち、圧倒的に女子が多く男子生徒が少なくなっている。また、こうした体験学習が東京では、すでに一部の乳児院で行われており、示唆に富む実践が展開されていた。今後の課題としては体験学習における内容の充実や行政機関(市町村)、学校など関連機関との連携のあり方などが多く指摘されている。